

「神を畏るるは学問の始め」

箴言 1章7節

聖学院大学 政治経済学部 政治経済学科教授 大高研道

1. 私にとっての礼拝

正直にお話します。私は礼拝での奨励が苦手です。自分の内面の奥深くを見られているような気がして、とても緊張するのです。講義とは違い、信仰によって神の言葉を伝える奨励において、求められるのはありのままの自分です。この場で私が強く感じるのは、飾った言葉や心の伴わない知識を披露しようとした時に鋭いまなざしで見つめてくる神の義です。不誠実の一点でも持ち込んでしまった時に感じる、全てを見透かされているような「恐さ」と表現した方がよいかもしれません。

皆さんは、チャペルに足を踏み入れる時、最初に何を感じられるでしょうか。開放感や安らぎを感じられる方も多いと思います。

しかし、私の場合、真っ先に襲ってくる感覚は「畏れ」です。このような表現は適切ではないかもしれませんが、とにかく自分の心の奥底まで見透かされているようで恐いのです。常に見られている、「神の前」に立っていることを強く意識させられる空間がチャペルであり、礼拝の場です。ですから、どちらかという厳しい目で見つめられているという意識が強く働きます。

2. 「神を畏るるは学問の始め」

本日の奨励のタイトルは、「神を畏るるは学問の始め」とさせていただきました。この言葉は、山形県の小国町にある基督教独立学園という高校の校舎に記されている言葉です。弟がそこで学び、私も何度か足を運んだ地ですが、その旧講堂には「神を畏るるは学問の始め」と記されていました。

本日の聖句である箴言第1章第7節の「主を畏れることは知恵の初め」を教育の基軸に据え、毎日聖書に接し、思索し、祈り、「自己」と「真理」を探究する学びの共同体を形成している学校です。同意のヘブライ語とともに、飾らず、角ばった文字で記されているその言葉を初めて見たときに、自分自身の内面に深く迫ってくるような圧迫感と心の静寂は、今でも忘れることができません。以来、学問の道を歩もうとしていた学生時代に接したこの聖句は、生涯の自身の学問に対する姿勢だけでなく、生き方そのものの基盤となる大切な言葉となりました。

3. 知恵とは何か

今、私はこの聖句にある「知恵」とは何かということを考えています。一般的に、私たちが考える知恵は「知識」と置き換えてもよいかもしれませんが。それは経験や技術の集積したものであるとして理解されます。そのような「知恵」(知識)は、「人間的知恵」(人知)といっても良いかもしれませんが。しかし、神の知恵は、この人知の源であるとともに、人知の「否定的媒介」であるという理解がとても重要であるように感じています。

現代社会は知識基盤社会といわれています。しかし、東日本大震災の際、福島原発事故が起きた時、専門家といわれる人々もどうしたらよいのか全く分かりませんでした。その説明や応答は非常にあやふやなものでした。私は、このような一部の「知識人」といわれる人びとに「知」を委ねていたことに愕然とするとともに、深い反省と懺悔の気持ちに襲われ、それは今でも払拭することができません。

これまで私たちは、いわゆる近代科学を基盤とした知識の提供者を知の担い手としてみなしてきました。科学万能主義が幅を利かせ、生命さえもコントロールできるように錯覚する「人知」としての知恵への疑いを持たないままに暮らしてきた私たち。そこには、自然や神への畏敬の念に基づいた学問への姿勢はありません。

4. 知の所有者

再び聖句のお話に戻りたいと思います。私は、今も変わらないのですが、ほんの小さな嘘に過剰なほど罪悪感を覚え、自分の発言に自信が持てず、他者の目を常に気にする気の弱い少年でした。そのような多感な青年期に、先の校舎に記されている聖句に出会いました。その時、私は神への恐れと同時に、常に何かに対する罪悪感(恐れ)とともに生きてきた「気の弱い」自分を肯定的に捉えることができるようになった気がしました。

新約聖書マタイによる福音書 5 章 3 節(新約 6 頁)にイエスの有名な「山上の説教」が記されています。それは「心の貧しい人々は幸いである」という言葉から始まります。さらに、「悲しむ人々は幸いである」と続きます。

本日司会を務めてくださっている阿部洋治先生は、弱り果て、打ちひしがれている人々、心が破れ、悩み、敗北感と劣等感に苛まれている人々こそが「本当の人生の渇き」を知っていると語っています。

そのような人こそ、本当の知の所有への道を歩む者になれると、私も考えています。そして、そのような人は、単に「人生の渇き」だけでなく、他者への暖かいまなざしと思いやりをも持ち備えた人でもあると思います。

5. 忘れないでほしい

私は、今から約 11 年前の 2006 年 4 月に本学に着任しました。本日お配りしたのは、着任して最初に担当した講義でのことを書かせていただいた小さなエッセイです。

「静寂」と題するこのエッセイでは、イギリス留学中に息子を妊娠した時の妻のこと、そして、聖学院大学に着任した直後の 4 月末に生まれた娘の話を書かせていただきました。

まだ聖学院での講義も慣れない着任直後のお話です。娘の出産に徹夜で付き添った翌朝に臨んだ講義で、疲れ果てていた私にある学生が「どうしたんですか？」と尋ねてきました。「子どもが生まれた」と言うと、どこからともなく拍手が聞こえ、それはドンドンと大きくなっていきました。その時の感動と拍手は今でも私の心に響いています。

私は、今年の3月をもって聖学院大学を退職します。最後に、このチャペルにいる皆さんだけでなく、聖学院大学の教員・職員、そして学生の皆さん全てに、その時と同じ言葉（エッセイの最後の段落に書かせていただいた言葉）をお送りして、私の最後の奨励とさせていたいただきたいと思います。

「忘れないでほしい。君たちが他人の悩み、苦しみ、頑張り、そして嬉しさに共鳴し、暖かなまなざしを持ち続けている限り、君たちにエールを送り続ける人たちが必ずどこかにいることを。」

11年間、誠にありがとうございました。

2017年1月12日 聖学院大学 全学礼拝